

中国語の“得”を伴う補語の分類

徐 国 玉

はじめに

1. “得補語”分類における問題点
2. “得補語”分類における問題点に関する調査
3. “得補語”分類について考慮すべき問題
4. “得補語”分類に関する一私案
 - (1) 動詞述語類
 - (2) 形容詞述語類
 - (3) 状態動詞述語類

おわりに

キーワード：“得”を伴う補語、可能、状態、
結果、程度

はじめに

“得”を伴う補語とは“説得_得好”〈うまく言う〉、“好得_得很”〈とてもよい〉のように助詞“得”を前に伴う補語（下線の部分）のことである。（以下“得補語”と言う）「中国語の“補語”は外国人が中国語を学習する場合、理解しにくいだけでなく、外国人に対する中国語教育における重要な研究テーマの1つである。」⁽¹⁾ “得補語”は「形式が多く、1字の場合もあるし、1つの長文の場合もある。従ってその意味は極めて複

雑である……」⁽²⁾。中国語補語の研究において“得補語”が表わす意味の論議はまだ多くなく、その分類については依然として不一致の状況である。この状況は教材の編集、中国語教育に対し不利である。そこで筆者はこの問題を深く掘り下げることが必要であると考えた。（以下の中国語用例については印刷の都合上、日本通用漢字体を使用した）

1. “得補語”分類における問題点

50年代からの“得補語”研究の主要なものを次に列挙する。

- 1) 中学校（日本の中学、高校に当たる）の学校文法体系では、“得補語”は可能を表わす場合を除いて、みな結果または程度を表わすとしている⁽³⁾。
- 2) 北京語言学院新編『新中国語』は、可能補語以外の補語はすべて程度補語であるとしている⁽⁴⁾。
- 3) 朱德熙の『文法講義』は次のように考えている：“得補語”は2種類存在する。1つは可能性を表わし、もう1つは状態を表わす⁽⁵⁾。

(1) 北京語言学院語言教学研究所編『現代漢語補語研究資料』の編集説明参照。

(2) 丁声樹など著『現代漢語語法講話』商務印書館、1979、63ページ参照。

(3) 『漢語知識』人民教育出版社（北京）、1980、165ページ参照。

(4) 『新中国語』（『基礎中国語教科書』日本語版）中華書局、1982、226ページ参照。

- 4) 朱德熙の見解と基本的に一致するのは胡裕樹が編集主幹をした『現代漢語（増訂本）』などである。異なる点はこの教材は“状態補語”を“情態補語”と言っている点である⁽⁶⁾。
- 5) 呂叔湘・朱德熙共著の『語法修辭講話』は、「意味の面から言えば、動詞の後の附加語はすべて動作の結果という意味を持っている。‘得’で繋がっているのはそれが特に顕著である」と述べている⁽⁷⁾。
- 6) 北京大学編の『現代漢語』は次のように考えている、「別の種類の結果補語は、動詞（或いは形容詞）との間を助詞‘得’で繋いでいる。」これはつまり“得補語”である。同書は別に次のように考えている：“得補語”は「通常、動作或いは性質が到達した程度の説明に重点を置いている。」⁽⁸⁾
- 7) 王還の「漢語結果補語的一些特点」という論文は、特に次のように強調している、「一般的文法書はそれ（筆者注‘得補語’）を‘程度補語’と言っているが、実際は‘結果補語’という名称の方が適切である。なぜならこの名称は紛れもなく動作の結果を表わしているからである。」⁽⁹⁾

以上様々な見解を比較してみると、1) 2) の見解が一般的中国語教材の編纂及び中国語教育に対して、最も広範な影響を与えている。中国国内の一般的中国語の教材は勿論のこと、日本で目にした中国語教材でも、大半が1) 2) の見解に従っている。

2. “得補語” 分類における問題点に関する調査

“得補語”が表わす意味を全面的ではなくても、それに近い理解を得るために、筆者は文学作品から一千例近くの関連例文を集め、逐一分析してみた。そして上記の“得補語”に対する様々な見解が、いずれも不完全であることを改めて認識した。意味が極めて複雑な“得補語”は、僅か1つか2つの類に分けるだけでは十分なのである。今に至っても、全員が賛同する分類を見付け出せないのが、この事をよく証明している。

中国語教材の“得補語”分類は種々様々であると同時に、どの分類もすべて不完全である。従って多くの中国語教育者が“得補語”を分類するに当たって、大変な困惑に落ち入ってしまうのは必然的なことである。例えば、或る教師は某誌の中で、次のように述べている、

可能補語以外の補語をすべて“程度補語”であると言ったら、授業中に困ってしまう。たとい全部“情態補語”（modal complement）であると言っても、依然として名称と実体は食い違っている⁽¹⁰⁾。

筆者は1998年2月、日本のある文法討論会で、“得補語”を使っている次の14例を示してアンケート調査を行った。調査対象人数13人（彼らはすべて中国語教育、研究に従事する者）、調査結果は次頁の通りであった。表中のアルファベットはそれぞれ、C 程度補語、J 結果補

↘ (5) 『語法講義』商務印書館、1982、125ページ参照。

(6) 『現代漢語（増訂本）』上海教育出版社、1981、361ページ参照。

(7) 『語法修辭講話』中国青年出版社、1953、25～26ページ参照。

(8) 『現代漢語』北京大学出版社、1963、173ページ参照。

(9) 「漢語結果補語的一些特点」(『語言教學與研究』1979、2)

(10) 甌齊「用助詞得連接的補語所表達的意義」(『漢語學習』1983、4) 参照。

中国語の“得”を伴う補語の分類

例	C	J	Q	Z	Q/Z	C/J	C/Q/Z	未
①说得一点儿也不对 〈言っていることは少しも正しくない〉	1	4	2	2	2		1	1
②她长得很美 〈彼女は美しい〉	6	1		3	2		1	
③小孩儿睡得正香 〈子供はよく寝ている〉	2	1	1	4	4		1	
④害怕得连心都跳出来了 〈恐くて心臓が飛び出しそうになった〉	3	3	2	1	2	1	1	
⑤那家伙死得好 〈あいつが死んでいい気味だ〉		2	5	1	2		1	2
⑥跑得太累了 〈走ってとても疲れた〉	5	4		1	2		1	
⑦疼得非常厉害 〈とても痛い〉	8			2	2		1	
⑧孩子们笑得嘎嘎的 〈子供はワハハと笑った〉	1		1	4	5		1	1
⑨写得清清楚楚 〈はっきりと書く〉	3	1	2	4	2		1	
⑩走得很快 〈速く歩く〉	5			4	3		1	
⑪把头摇得象拨浪鼓似的 〈頭をデンデン太鼓のように振る〉		1	3	3	5		1	
⑫醉得不省人事兒 〈前後不觉に酔いつぶれる〉	1	5	2	2	2		1	
⑬恨得直咬牙 〈恨み骨髓に達する〉	3	2	1	3	3		1	
⑭急得没了主意 〈焦って我を忘れる〉		6	1	3	2		1	

語、Q 情態補語、Z 状態補語、未 未回答。
数字は人数を示す。

なぜこの様に同じ表現に対して大きな解釈の相違があるのか？ これは無論“得補語”の意味が非常に複雑であるということと関わっているが、同時にまた回答者が問題を考える角度が違うということにも関係している。しかし更に重要なのは、“得補語”の研究がまだ十分でないことにある。十分でないために分類に大きなずれが生ずるのである。

3. “得補語” 分類について考慮すべき問題

“得補語”は一体どのような意味を表わすのか？ どのように再分類するのか？ 検討に入る前に、次のいくつかの問題を説明しておく。

(1) 今までのところ、“得補語”の意味分析・分類の状況から言って、“得補語”の意味を分

析するときには、次の3種類の意味をはっきり区別しておくべきである。

1) “得補語”を構成する語句が本来持っている意味と、“得補語”と述語の関係意味とを、はっきり区別すること。例えば、

①大風吹得大地上一个行人也没有了。

〈大風が吹いて大地上に一人の通行人もいなくなった〉

②一着走錯，滿盤皆輸；弄得上不上，下不下……（高曉聲）

〈一石の打ち違い、全局の負けになる、進むに進めず、退くに退けず……〉

もし“得補語”の語句自身の意味だけで考えれば、例①②の補語の意味は状態であると言うのが正しい。しかし補語と述語という角度から見ると、“大地上一个行人也没有了”が表わす状態は“(大風)吹”の後に起こった状態で、“上不上、下不下”は“弄”の後に出来た状態である。つまり両者はいずれも結果の状態を表わしているのである。“得補語”の意味分析をする時には、補語と述語の関係という角度から分析するよう特に注意しなければならない。

2) 述語の意味と“得補語”の意味上の相違。形容詞+“得補語”という構造の述補構造は、すべて事物の状態を描写するものである。例えば、

①盡管秋天的陽光非常明麗，屋內光線却暗淡得很。（徐遲）

〈秋の日差しは大変明るく美しいが、屋内の光線は大変暗い〉

②我得意得很，覺得是最富有的人了。（賈平凹）

〈私は大變得意で、一番裕福な人になった気がした〉

例①の“暗淡得很”というこの述補フレーズは屋内光線の状態を描写しており、例②の“得

意得很”という述補フレーズは“我”の状態を描写している。形容詞述語と“得”補語で組み立てられた述補フレーズは状態を表わすが、それによって“得補語”が状態という意味を表わすとは断定できない。なぜなら“很”〈なかなか〉はただ状態の程度を表わすだけのものであるからである。

3) 述語と“得補語”で組み立てられた述補フレーズの意味は、可能の意味を除くと、その他はみなすでに現実の事物となった事柄と言える。例えば、

①石板地因下了雨變得滑腳了。（巴金）

〈石板を敷いた地面は雨が降って滑るようになった〉

②屋子狹窄得象鳥籠似的。

〈部屋は鳥かごのように狭い〉

例①の“變得滑腳了”は雨が降ってからの地面の事実を言っており、例②の“狹窄得象鳥籠似的”は現実になった部屋の状態を言っている。しかし以上の事実が有るからと言って、例①②の“得補語”はすべて結果を表わすと断定することはできない。

(2) “結果” “程度” “状態 (情態)” この3つの概念は、“得補語”の意味分析と関係が密接なので、これらの内包および繋がりを説明しなければならない。(中国社会科学院語言研究所編『現代漢語詞典』による) “結果”とは何か? “結果”とは一定の段階において事物の発展が到達した最後の状態である。つまり“結果”とは一般の状態ではなく、1個の完成された状態である。“状態”とは人または事物が表現する形態である。世界に形態を持たない事物は存在しない。無論、事物の形態には具体的と抽象的の区分がある。人間は事物を認識するとき普通その外在形態を通して認識する。では程度とは

何か？程度とは「事物の変化が到達した状況」である。程度とは、同じ事物が異なる運動段階で表わす異なる状態の比較、および同じ種類の事物がそれぞれの運動段階で表わす異なった状態を比べて獲得した認識である。事物の状態を比べないと程度についての認識は獲得できない。“略微”、“稍”〈同前〉〈少し、いささか〉、“相当”〈かなり、相当に〉、“很”〈非常に、大変、とても〉、“非常”〈とても、まことに、非常に〉、“极”〈はなはだ〉など程度の意味を表わす語句は、人々が事物の異なる発展段階の状態を比べて獲得した認識の成果である。

述語+“得補語”という構造の述補構造は、事物の発展、変化過程の状態を表わすので、事物の発展、変化を表わす状態の連続体が形成できる。例えば、

A. ①把他打得站不住了。

〈彼を立てられないまで殴った〉

②把他打得一動也不能動了。

〈彼を少しも動けなくなるまで殴った〉

③把他打得沒气了。

〈彼を息が絶えるほど殴った〉

B. ①他批改作業批改得比較認真。

〈彼は宿題を比較的まじめに批評し訂正する〉

②他批改作業批改得很認真。

〈彼は宿題をととてもまじめに批評し訂正する〉

③他批改作業批改得非常認真。

〈彼は宿題を非常にまじめに批評し訂正する〉

A、Bの表わす事物の発展、変化の状態を比べてみると、程度の高低、軽重がわかる。しかし、

それによってA、Bの“得補語”が程度の意味を表わすとは断定できない。

(3) 本論において検討する“得補語”の分類は、意味分類である。語感だけで分類するのは適当ではないので、分類する時に有効な形式的根拠を探しあてるのが最もよい。有効な形式的根拠を探しあてれば、同一の事柄に対して人によって見方が異なるのを防ぎ、分類の問題を根本的に解決できるようになる。本論はその点につき試みに検討してみる。いくつかの分類の形式的根拠はすでに検討されており、明かになっている点もある。例えば可能補語の形式的根拠である。すでにはっきりした問題も本論文で適宜説明する。

4. “得補語”分類に関する一私案

次に“得補語”の意味および分類についての見方を具体的に論じよう。

“得補語”の意味は述語の語句の性質、意味と密接に関連しているので、述語の語句の性質に基づいて“得補語”を3種類に分ける。すなわち動詞述語類、形容詞述語類および状態動詞⁽¹¹⁾述語類である。

(1) 動詞述語類

動詞述語類は表わす意味が比較的多く、可能、状態、結果の3つの意味を持っている。この3つの意味はみな他の種類を区別する形式を持っているので、3種類に分けることができる。

1) 可能補語

可能補語についての見方は大体一致している。

(11) “状態動詞”とは主に人、動物の精神、心理、生理

状態を表わす。(劉月華1993参照)

まだ議論があるのは“可能補語”という名称である⁽¹²⁾。可能補語が動作、変化がある状態または結果に達することができるかどうかを表わす。可能補語の持つ語感をはっきりしており、同時に明確に区別がつく形式を持っている。補語になるのは簡単な形式の形容詞、動詞で、肯定形式とそれに対応する否定形式を持っている。例えば、

看得見〈見える〉／看不見〈見えない〉

進得去〈入って行ける〉／進不去〈入って行けない〉

外に、肯定式と否定式の両方を合わせ用いて質問する形式を持っている。例えば、

這本書他看得懂看不懂？

〈この本は彼が読んでわかるか〉

你背得動背不動？

〈あなたは背負えるか〉

2) 状態補語

ここで述べたい状態補語とは、一般的に言われている状態補語とは同じでない。まず次のいくつかの例文を見てみよう。

①孩子們笑得嘎嘎的。

〈子供達はワハハと笑う〉

②他學習漢語學習得很認真。

〈彼は中国語をなかなか真面目に勉強している〉

③他分析問題分析得十分仔細。

〈彼は問題を大変詳細に分析する〉

④他們倆工作干得很賣力。

〈彼ら2人は仕事をとても努力してやっている〉

この4つの例文を分析すると、その“得補語”はみな動作主自身が呈した様相であることが分

かる。例えば「ワハハ」は「笑う」という動作が表わす様子を描写しているのであり、「なかなか真面目」は「勉強する」という動作の様子を描写しているのである。

では、状態補語は形式上に何かその他の“得補語”と区別するところがあるのだろうか。

a. 状態補語は動作、変化など自身が呈した様相を描写するので、多くの状態補語は連用修飾語に変換できる。例えば上記の例①～④はみな変換できるのである。しかし、語句の形式は一般的にすこし変えなければならない。

①' 孩子們嘎嘎地笑。

②' 他很認真地學習漢語。

③' 他十分仔細地分析問題。

④' 他們倆很賣力地干工作。

その他に、補語は連用修飾語に変換すると、意味は割合顕著なまたは微細な変化を起こす。例えば変換する前には、文の中心は補語にあり、変換すると文の中心は動詞または形容詞に移る⁽¹³⁾などである。一部の状態補語は連用修飾語に変換できない。なぜなら文法的・意味的な制限があるからである。例えば、

⑤這隻獅子比那隻獅子跑得快。

〈このライオンはそのライオンより走るのが速い〉

→ *這隻獅子比那隻獅子快跑

⑥他比剛才笑得更響亮，更長久。

〈彼は今さっきより笑うのが一層高らかに、一層長く長く続いた〉

→ *他比剛才更響亮，更長久地笑

例⑤⑥が変換できない原因は、“比”構文の述語の前には、いくつかの助動詞、副詞が用いられるが、その他の語句は一般的に制限を受け

(12) 李曉琪 (1985) は一般に言われている可能補語が表わすのは“可能”ではなく、“できる”の意味であると述べている。

(13) 劉月華「状態補語と補語的比較」(『語言教學與研究』1982, 1) 参照。

ているからである。いったいどの補語が連用修飾語に変換できるか、どの補語が連用修飾語に変換できないか、その制限の要素は一体何か。これらの問題はまだ一層検討しなければならない。

b. 後で検討する結果補語に比較して言えば、状態補語は表わした状態が述語は表わした動作、変化と時間の前後の関係を分けにくい。例えば「ワハハと笑う」という状態を「笑ったあと」に出た状態と理解できず、「なかなか真面目に勉強する」という状態も「勉強した」に出た状態とは理解できない。つまり「ワハハ」と「なかなか真面目」という2つの状態はそれぞれ「笑う」「勉強する」という2つの動作と同時に出現しているのである。

c. 補語に焦点をあてた“～的(状況)怎麼樣?”〈～の情況はどうか〉という質問形式を持っている。例えば“他學習漢語學習得很認真”という文に対して“他學習漢語學習的(状況)怎麼樣?”〈彼の中国語を勉強する状況はどうか〉の質問形式が存在する。語句の形式が簡単な状態補語はまたその他の質問形式を持っている。これについては後で述べる。

3) 結果補語

結果補語は更に2種類に分けられる。

I 補語は具体的に動作をしてから、または変化が終わってから出現した新しい状態を物語っている。例えば、

①雷在低低的雲層中間轟轟響着，震得人耳朵嗡嗡地響。(峻青)

〈雷が低いむら雲の中でゴロゴロ鳴っていて、震動で耳がブンブンと音を立てている〉

②我見到了我的父母，他們被打得遍体鳞傷……(賈平凹)

〈私は両親に会った。二人は打たれて全身

傷だらけ……〉

③紅衛兵把他鬪得抬不起頭，直不起腰来。

〈紅衛兵は彼を攻撃し、彼は頭をもちあげられなく、腰も伸ばせなくなった〉

④這個小姑娘長得很好看。

〈この女の子は器量がたいへんよい〉

⑤美麗如錦的渭河平原也驟然變得醜陋而蒼老。

(王汶石)

〈美しい渭河平原にもわかに醜く老いさらばえた〉

⑥哥哥一連喝了七杯酒，喝得不省人事了。

〈兄は続けざまにお酒を7杯飲んで、前後不覚に落ちいった〉

もし例①～⑥の結果補語の状況を具体的に分析すると、次のように異なるところが分かる。

例①②③はA事物の動作がB事物に影響を及ぼしたあと、B事物に新しい状態が出現したことを述べている。例④はA事物の一定の運動過程が終わってから出現した状態を述べている。例⑤はA事物自身の変化が終わってから出現した新しい状態を述べている。例⑥はA事物がそれ自体を変化させるB事物に接してから出現した新しい状態を述べている。

II 補語は論断を表わす。言い換えすれば、補語は論断の形式で結果を説明する。例えば、

①我没有還口，只是独独地走去，覺得妻罵得是对的……(賈平凹)

〈私は言い返さず、ただ一人で立ち去ったのだが、妻が罵るのは正しいと思った〉

②你来得真是時候。

〈あなたはほんとうにいいところへ来た〉

③他今天講得好，發揮出了水平。

〈彼は今日うまく話し、自分の力を十分に發揮した〉

④這個問題爸爸看得不準。

〈この問題は父が正しく見ていない〉

⑤他的路走得不对。

〈彼の歩む道は間違っている〉

具体的に分析して言えば、例①②③の“得補語”はみなすでに行った動作の結果に対して肯定の論断を出したのである。例④⑤はみな否定の論断を出したのである。比べて言えば、Ⅰの表わす内容は比較的に具体的であり、客観的である。Ⅱの表わす内容は比較的に抽象的であり、主観的である。ⅠとⅡを比べてみよう。

- | | | |
|---|---|--------------------|
| ① | { | a. 這次打得他動不了了。 |
| | | 〈今回彼は殴られて動けなくなった〉 |
| | { | b. 這次打得好。 |
| | | 〈今回殴り方がよかった〉 |
| ② | { | a. 他的課講得學生都睡着了。 |
| | | 〈彼の授業は学生がみな寝てしまった〉 |
| | { | b. 他的課講得不好。 |
| | | 〈彼の授業はよくない〉 |

例文の①②のaはⅠ類型で、bはⅡ類型である。Ⅱ類型は直接に具体的に結果を説明しないので、論争の起こりやすい分類である。他に、Ⅱ類型が比較の抽象的であるというのは理解しやすいが、主観的という点では少し説明が必要である。「今回彼は殴られて動けなくなった」というこの結果の評価について、ある人は「今回殴り方がよかった」と評価し、またある人は「今回殴り方があまりよくなかった」と評価して言う可能性があるからである。

結果補語は状態補語より見分けやすい。

a. 結果補語は説明した結果と動作、変化とはっきりした時間的前後関係と直接的な因果関係がある。例えば「彼らに打たれて体中傷だらけだ」は、その「体中傷だらけだ」という結果は「打つ」という動作をしてから、「彼ら」に出現した状態変化である。同時に、因果関係の角度から言えば、「体中傷だらけ」というこの結果は「打つ」という動作を行って出現した状態であ

る。

b. 結果補語は多くの状態補語とは異なり、連用修飾語に変換できない。例えば、

①他們被打得遍體鱗傷。

〈彼らは打たれて体中傷だらけだ〉

→ *他們被遍體鱗傷地打

②他喝得不省人事了。

〈彼は飲んで前後不覚に落ち入った〉

→ *他不省人事地喝

③妻子罵得对。

〈妻の罵るのは正しい〉

→ *妻子对地罵

④你来得好。

〈あなたは良いところへ来た〉

→ *你好好地来

c. Ⅰ類型は補語に焦点をあてる「～的結果怎麼樣？」という質問形式を持っているが、Ⅱ類型は持っていない。例えば「彼は飲んで前後不覚に落ち入った」という文は、「他喝的结果怎麼樣？」〈彼は飲んだ結果はどうだ〉という質問ができる。「他今天講得好」〈彼は今日はどうまく話した〉という文は、*「他今天講的結果怎麼樣？」という質問ができない。

その他に、語句形式の簡単な状態補語、結果補語は共に可能補語とは異なる質問形式と否定形式を持っている。例えば、

状態補語

看得仔細

〈細かに見る〉

→ 看得仔細不仔細？

〈細かに見るか見ないか〉

→ 看得不仔細。

〈細かに見なかった〉

→ 没看仔細。

〈細かにみなかった〉

結果補語

説得対

〈言うことは正しい〉

→ 説得対不對？

〈言うことは正しいか正しくないか〉

→ 説得不對。

〈言うことは正しくなかった〉

→ 没説得。

〈言うことは正しくなかった〉

(2) 形容詞述語類

形容詞述語類の“得補語”はどんな意味を表わすか。この問題を検討する前に、まず形容詞と動詞の文法的特徴の相違を述べておく。

形容詞が動詞（状態動詞を除く）と異なる文法的特徴の1つは、程度を表わす語に修飾され得ることである。例えば、

很好 〈とても良い〉

相当重要 〈かなり重要だ〉

非常精彩 〈とても素晴らしい〉

極其巨大 〈極めて大きい〉

形容詞は程度を示す語句に修飾されることができ、形容詞の表わす性質、状態はその程度によって区分けすることができるからである。

注意しなければならないのは、すべての程度を示す副詞が補語になるわけではない。低い程度の意味の副詞は、例えば“稍微”、“略微”〈少し、わずか〉、“微”〈少し、いささか〉、“稍稍”〈ほんの、わずか、ちょっぴり〉などは、単独で“得補語”にならないばかりでなく、単独でその他の補語になることもできない。高い程度を表わす“極”〈きわめて〉、“非常”〈とても、非常に〉なども単独で“得補語”になることができない。単独で“得補語”になるのはただ“很”だけである。例えば、

①在這樣的地方住，真讓我心里憋悶得很啊！

〈こんなところに住んで、私は胸苦しさをとても感じるなあ〉

②他們的行動好得很！

〈彼らの行動はとても良い〉

“很”が“得補語”になって持つ役割は性質または状態の程度を表わす。

では、“很”以外の“得補語”になる語句はどんな意味を表わすか。つぎのいくつか例文を見てみよう。

①那幢破旧的房子，里面黑得要命。

〈そのぼろ家屋は中がとても暗い〉

②一到放暑假，它开起花来，真是“繁”得不得了。

〈ひとたび夏休みになると、その花が咲きはじめ、ほんとうににぎやかだ〉

③她的思想单纯得象水一样。

〈彼女の考え方は水のように単純だ〉

④每日烧香的和游玩的多得如赶庙会一样……

（姚雪垠）

〈毎日焼香する人と遊覧する人は縁日の時のように多い……〉

“得補語”になる語句自身の意味から言えば、例①～④はみな状態という意味を表わす。“得補語”と述語の間の意味関係から言えば、“得補語”はみな程度という意味を表わす。つまり状態の意味を表わす語句で程度を表わすことは、人々が具体的に程度を表わす1つの手段である。一般に、みな“吃掉了”〈食べてしまった〉、“刮跑了”〈吹き飛ばされた〉、“打死”〈打ち殺す〉、“写完了”〈書き終わった〉これらの述補構造中の補語になる動詞は結果という意味を表わすと考えられているが、その根拠は補語と述語の意味関係の分析である。

“很”以外の状態意味の語句が“得補語”になる時、程度の意味を表わす、という筆者の主

張を裏づけるもうひとつの補足的根拠は、“很”を以て状態という意味の語句に替えることができるという事実である。替えた文は元の文の程度という意味と大差がない。例①～④を替えてみよう。

- ①' 那幢破旧的房子，黒面黒得很。
- ②' ……它开起花来，真是“繁”得很。
- ③' 她的思想单纯得很。
- ④' ……每日烧香的和游玩的多得很。

形容詞述語類の“得補語”は次の3つの特徴を持っている。

a. 動詞述語類中の結果補語を比較して言えば、“得補語”の意味は述語の性質または状態意味と時間の前後関係を持っていない。例えば“静得很”〈とても静かである〉は、“很”を静かになってから出現した程度の意味には理解できない。それは“很静”の“很”と“静”は時間前後関係を区別することができないのと同じである。もちろん時間前後の関係を区別することができないと言っても述補構造は時間と関係がないと言えない。これはすでに述べたので再び論じる必要ではない。

b. “得補語”になる語句は連用修飾語に変換できるものが多い。例えば、

- ①这里方便得很。

〈ここはとても便利だ〉

→ 这里很方便。

- ②学校里今天熱鬧得象個劇院似的。

〈学校には今日劇場のようににぎやかである〉

→ 学校里今天象個劇院似的熱鬧

連用修飾語に変換できないのも文法要素などの制限がある。例えば、

- ③我恨他恨得要死。

〈私は彼をひどく恨む〉

→ *我要死地恨他

- ④這幾天，我忙得不得了。

〈この数日、私は忙しくてたまらない〉

→ *這幾天，我不得了地忙

“要死”“不得了”みな連用修飾語にならないのは連用修飾語になる機能がないからである。

c. 述語に焦点をあてる“～A〔形容詞〕嗎？”“～A〔形容詞〕不（A）？”など質問形式を持っている。例えば、

- ①這孩子聰明嗎？／這孩子聰明不（聰明）？

〈この子供は頭がいいか？／この子供は頭がよいかよくないか？〉

— 這孩子聰明得很。

〈この子供は頭がとてもいい〉

- ②那地方熱鬧嗎？／那地方熱鬧不（熱鬧）？

〈そこはにぎやかか？／そこはにぎやかか、にぎやかではないか？〉

— 那地方熱鬧得不得了。

〈そのところは非常ににぎやかである〉

指摘しなければならないのは、“～A嗎？”“～A不（A）？”このふたつ質問形式を使えば、また修飾構造などを使って答える。例①の質問は“這孩子很聰明”と答えられる。例②の質問は“那地方很熱鬧”と答えられる。形容詞述語類は独自の質問形式がないが、どの質問形式も動詞述語類の質問形式とは異なる。

d. 相応ずる否定形式はない。

(3) 状態動詞述語類

状態動詞は動詞の文法特徴および形容詞の部分文法特徴を合わせ持っているので、状態動詞述語類の“得補語”の意味は動詞述語類および形容詞述語類の意味を兼ねる。単独でひとつの類を立てる必要がある。

状態動詞は形容詞と同様程度副詞の修飾を受けることができる。例えば、

很痛 〈ひどく痛い〉

非常想念 〈懐かしく思う〉

極恨〈はなはだ恨む〉

十分愛〈十分に愛する〉

“很”あるいは普通状態ではない語句を用いた“得補語”が持てる。前の動詞述語類と形容詞述語類の“得補語”についての分類の根拠によって、状態動詞述語類の“得補語”は程度補語と結果補語に分けることができる。その程度補語は、例えば、

①好久不見了，真是想念得很！

〈久しぶりですね、ほんとうに懐かしいです〉

②对待秦腔，愛者便愛得要死，惡者便惡得要命。（賈平凹）

〈秦なまりに対して、愛する人はとても愛して、憎む人はひどく憎む〉

③今天肚子疼得慌。

〈今日腹がひどく痛い〉

④婆婆見添了孫孫，喜得了不得。（馬烽）

〈おばあさんは孫が生まれたのを見て非常に喜んだ〉

⑤胳膊一動，疼得針扎似的。

〈腕を少し動かすと針で刺すように痛い〉

⑥父親給她說的時候，她困得不時打盹……

（賈平凹）

〈父が彼女に話した時、彼女は眠くてこっくりしていた〉

その結果補語は、例えば、

⑦他也曾肉痛得簌々流淚。（高曉聲）

〈彼もかつて肉が痛くて涙がはらはらと落ちた〉

⑧這對夫妻近來愁賊偷，愁得白天無心做事…

…（高曉聲）

〈この夫婦は最近泥棒を心配して、昼でも何もする気が起らない〉

⑨一時找不到什麼好办法，他氣得臉紅脖子粗。

〈すぐにはよい方法を探しあたられなくて、彼は怒って顔を赤らめ首は太くなった〉

⑩地疼得起不了床了。

〈彼女は痛くて起きられなくなった〉

⑪他想法想得吃不下飯，睡不着覺。

〈彼はホームシックになってご飯が食べられなく、眠れなくなった〉

“得補語”についての分類は図でつぎのように説明する。

動詞述語類 { 1. 可能補語
2. 状態補語
3. 結果補語

形容詞述語類 { 程度補語

状態動詞述語類 { 1. 程度補語
2. 結果補語

おわりに

“得補語”の文は文学作品や口語での出現の頻度が高く、中国語教材の編集と教育の重要な内容の1つである。“得補語”の問題を深く掘り下げて、“得補語”の意味および分類についての見方を統一するのは、重要なばかりでなく、切実な問題である。本論がもし“得補語”に対する注意を喚起するものになれば、筆者の目的を達成したと言えよう。

附記

本稿をなすにあたり、望月八十吉先生、張濟卿先生、山田忠司先生に、多くの貴重な意見をいただき、日本語と英文作成にご援助いただいた。ここに特に記して、お礼申し上げる。

参考文献（本文で示したものは除く）

- 1) 慶力「程度補語為什麼沒有相應的否定式」
（『哈爾濱師專學報』1984. 2）
- 2) 李臨定「帶“得”字的補語句」（『中國語文』
1963. 5）
- 3) 劉月華等著『實用現代漢語語法』外語教學
與研究出版社 1983
- 4) 劉丹青「三種補語 三種否定」（『語文月刊』
1983. 9）
- 5) 李浚平「試析帶“得”動補結構的多義現象」
（『昆明師專學報』1984. 3）
- 6) 李曉琪「關於能性補語式中的語素“得”」
（『語文研究』1985. 4）
- 7) 繆錦安編著『漢語的語義結構和補語形式』
上海外語教育出版社 1990
- 8) 王松茂主編『漢語語法參考資料』中國社會
科學出版社 1983
- 9) 魏立湘「可能補語與結果補語」（『徐州師範
學院學報』1983. 4）
- 10) 楊石泉「結果補語與程度補語的糾葛—說補
語(1)」（『邏輯與語言學習』1985. 3）
- 11) 岳俊發「“得”字句的產生和演變」（『語言
研究』1984. 2）